神奈川新聞
新聞　2010年（平成22年）11月22日　月曜日

ぬくもり

終末期の患者にハープを奏でる「ハープセラピー」という活動を行っている人がいる。横浜市港北区の神藤雅子さん(58)。米国では以前から医療施設で取り入れられているが、日本では少ない。先駆者の神藤さんは、最期が迫る患者に寄り添うように音を紡ぎ、患者やその家族に癒やしの時間をもたらしている。

（松村　祐介）

ハープセラピー

終末期癒やす音色

横浜 神藤さん 患者に寄り添い

「こんにちは。ハープセラピーにまいりました」。横浜市中区の市立みなと赤十字病院。緩和ケア科の個室で神藤さんがハープを奏で、優しい旋律が病室を包む。最初は童謡。ベッドに横たわる男性(72)が静かに寝息を立てたのを確認すると、曲は〝即興〟へ。演奏は一度も途切れず30分続いた。「もっと続けてほしいくらい。吐き気が治まったよ」。かすれ声の男性は笑みを浮かべた。

ハープセラピーは、患者の症状改善を前提としておらず、心身をリラックスさせ音楽に身を委ねてもらうことが目的。神藤さんは演奏中も患者から目を離さず、表情や呼吸の速さを確認しながらリズムや曲調を自在に変える。「知っている曲だと脳が勝手に反応する」（神藤さん）ので即興が中心。無意識に聴く感覚が望ましいという。

神藤さんは英国留学などを通じてハープを学び、古楽器の音色に魅せられた。「この音で人の役に立てないか」。そんなとき、ハープセラピーを知り米国の養成講座を受講。2004年に日本人で初めて資格を取得した。

だが日本の病院で活動を始めようとしても、医療資格がないことなどを理由に断られた。風向きが変わったのは数年前。緩和ケアに注目が集まるにつれ、病院や福祉施設などが門戸を開き始めたという。

現在、同病院や東京都内の病院を定期訪問し、希望する患者に音色を届けている。死期が迫り、言葉をうまく話せない患者や昏睡状態の患者もいる。大半は一回限りの演奏。だからこそ神藤さんの思いは強い。

「厳粛な場で演奏するのが最初は怖かった。今は患者の方に寄り添って一緒にいるという感覚。最後は離れ難くなります」と神藤さん。演奏は患者本人だけでなく家族から喜ばれることも多い。呼吸の安定や催眠、鎮痛などの効果を呼ぶこともあるという。

後継者育成のため、神藤さんはことし「日本ハープセラピー協会」を旗揚げした。顧問に日野原重明・聖路加国際病院名誉院長らも名を連ね、来年には養成講座を開講する。神藤さんは「活動は派手ではないが深い。ぜひパイオニアになってほしい」と受講を呼び掛ける。申し込みの締め切りは今月25日。問い合わせは、メール（harptherapyjapan@gmail.com）で。

ベッドで横になる患者の前でハープを奏でる神藤さん＝横浜市立みなと赤十字病院